

第十七号



尋常
小學
新體
讀本

卷六

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 7 9 5 7 a

福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ki44j

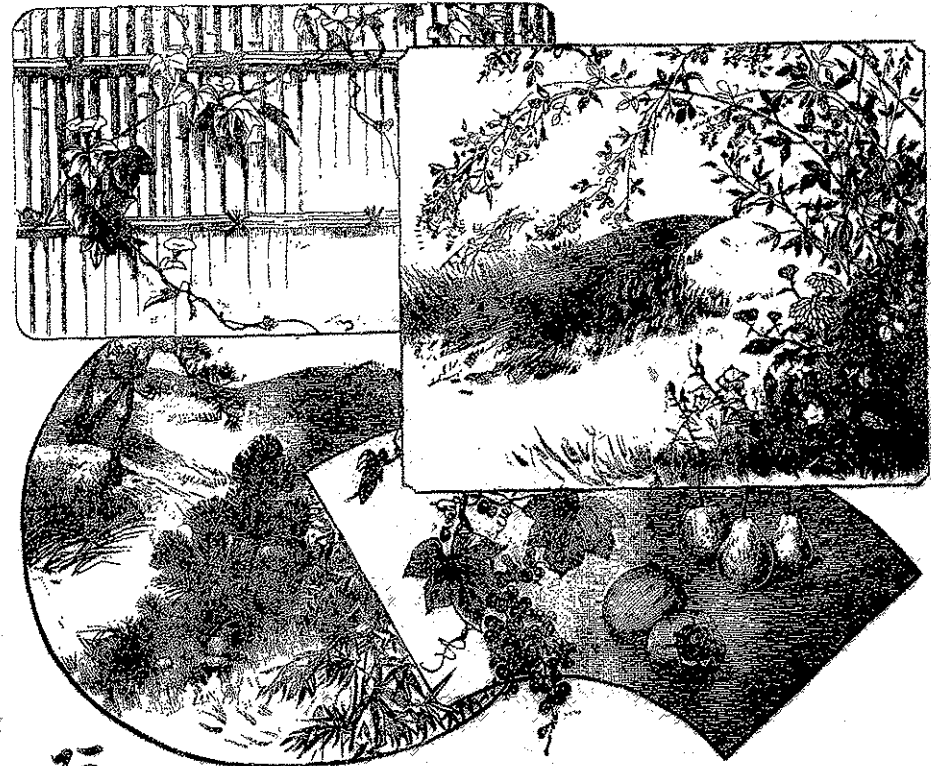
日一月十年七廿治明
簿定檢省部文

尋常
小學
新體讀本



卷六

桔梗 萩 菊



第一課 秋

九月十月十一月

を秋といふ。秋ハ、
涼しくして、菊萩
桔梗あどの美しき
花咲き、なり。あき
ぶだうあどれ
あまき木の實の

あめくする時なり。

今ハ九月の初めふて、暑さ未去れど
も朝夕ハやうく涼くなりたり。まがき
ふ咲けるあさがほハ、花の形や、小さく
ありとれども、なほ美しきあめあり。

此の月々末に至れば山の木の葉や、
紅葉して美しくあり、松山にハ、初茸松茸
など生に出づる故、野ふ行きて景色をふ

景色

紅葉
初茸

がめ林に入りて葺がりなほものあり。

袖ふきこのつす 朝風も

日々に涼しく なりゆけば

萩菊 桔梗 初紅葉

おどろきのきも 色づきて

花ふも實ふも とりぐに

あかぬ野山 け ながめあか

文題 一菊。二葉のふきあふ口上書。

第二課 果物

果物 梨 柿 葡萄

人の好みて食ふ果物ハ、梨柿葡萄の
たぐひあり。

甘結

熟

梨ハ、四月頃白き花咲き、秋に至りて
實を結ぶ。實ハ、味ひ甘くして水分多し。
柿ハ、五月頃白き花咲き、秋ふ至りて
實を結ぶ。熟したる實ハ、赤くして味ひ
甘し。

葡萄ハ、五月頃花咲き、秋小至りて實を結ぶ。實ハ、一ふさ小二十粒あり。熟せざる實ハ、色青く味ひさくしてあぶけれど、も熟したる實ハ、紫色にて味ひ甚甘し。

梨柿葡萄のたぐひハ、さづて味ひ甘き故に、思わざ食ひさくして、病を起すことあり、心して程よく食ふべし。

文題 一、梨。 二、己が庭に生りたる葡萄をおくる。口毒。

第三課 養生

人ハ毎日程よく運動して、からだを健ふすることを務むべし。も、甘き物を食ひて、さわりあつ、少くも手足をつのハざる時、ハからさやうやくおとろへて、必病を起すべし。

からさくに垢つきたるを、大いふ養生に害あるものなれば、務めて之を清くを

運動
健康
務

害
養生

べー。

汚れたる衣服を着るハ、からだに垢つき
たると同ドことなれば、怠らず之を洗ふ
べー。

多く心をつかひ、思を苦むるも、亦、養生
によるーからず。されバ、常々心を平の
ふー、思を少くーて、怒とよくとを
つーむづー！

勤

馬場

種々
武藝



昔肥前^{ヒゼン}の國唐津^{カラツ}の城主に、寺澤廣高^{テラザハヒロタカ}と
いへる人ありけり。毎朝早く起きて、日々

の職を勤め、それより
直小馬にけりて、馬場
をかけめぐれり。食事後ハ、
種々の武藝をーて、からご
を健にー、用事をければ、
早くいねて、心を休め

からだを養ひたり。

無用
語
廣高常にいへるやう、「夜ふけまで無用の事を語り合へば、以てたづらに心をつゝらせ明日は勤めをもさまたぐるものあり。」とて、召使の人々へも、早く以て事を取らせて、ねぶりにつかゝめとぞ。

文題 一、葡萄。 二、病氣 見まひの返事。

第四課 大日本帝國

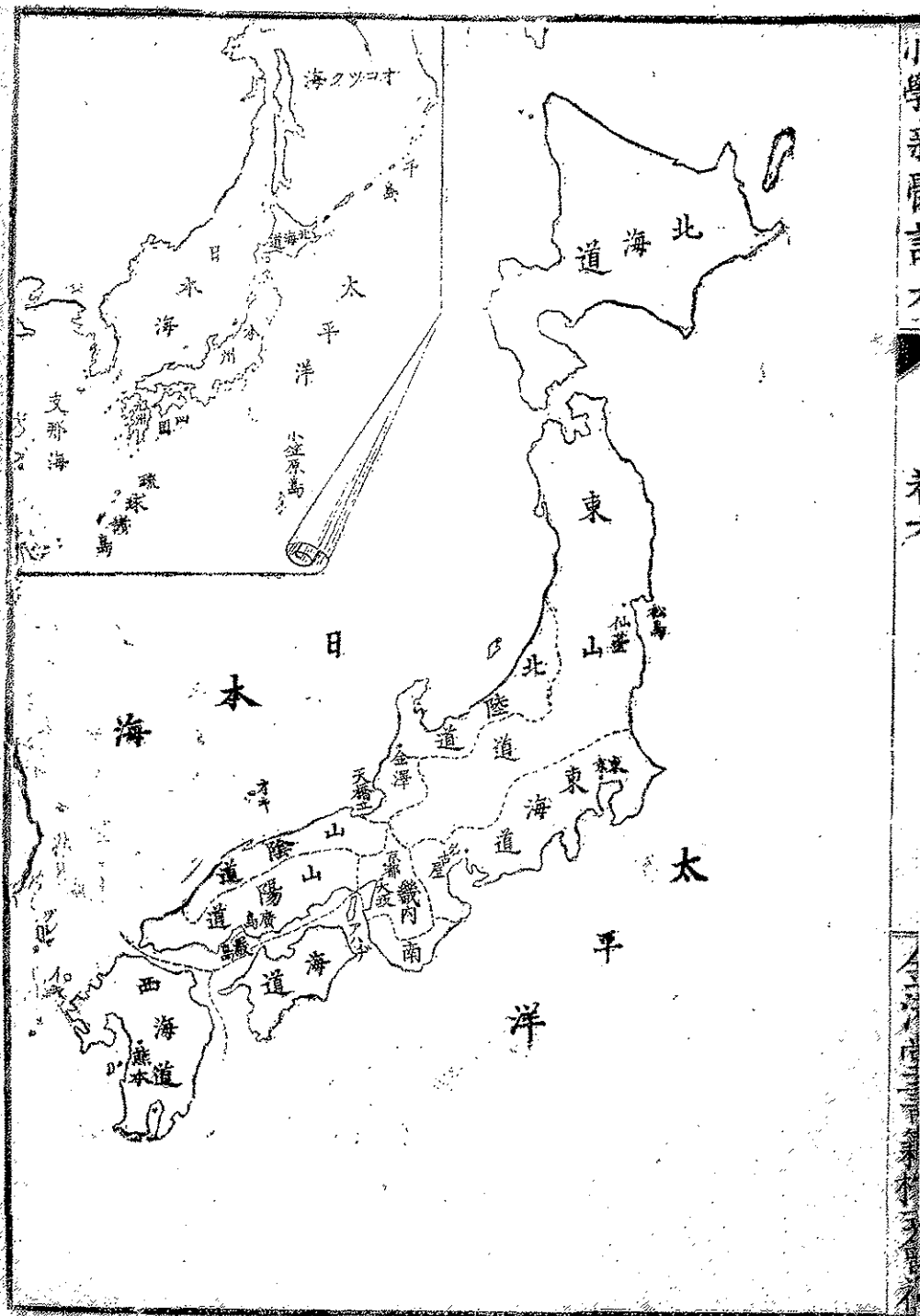
地圖

帝國

左ノ地圖ヲ見ヨ、コレハ我等ノ住メル大日本帝國ヲ天ヨリ見下シタル形ノ圖ナリ。圖ノ上ノ方ハ北ニシテ、下ノ方ハ南ナリ。故ニ右ハ東ニシテ、左ハ西ナリ。

非

大日本帝國ハ此ノ圖ニテ見ルガ如ク、一ツノ國ニハ非ズシテ、四ツノ大キナル嶋ト、數多ノ小サナル嶋々トノ集リテ、



成り立ちタルモノナリ。

中央

四ツノ大キナル嶋ノ中、中央ノ最モ
大イナルモノヲ、本土トイフ。本土ニハ
五十五國アリ。

本土ノ北ニアル嶋ヲ、北海道トイフ。此
ノ中二十國アリ。

本土ノ西ニアル嶋ヲ、九州^{キウシュウ}トイフ。此
ノ嶋ニハ九ツノ國アリ。

本土ト九州トノ間ニアル嶋ヲ、四國トイフ。此ノ嶋ニハ四ツノ國アリ。此ノ外、小サキ嶋ニテ、一國ヲ成スモノ七ツアリ、故ニ之ヲ合ハセテ、國ノ數八十五アリ。

北海道ノ東北ニハ、千嶋諸嶋相連リ、九州ノ西南ニハ、琉球諸嶋相集リ、本土ノ南ノ方ニハ小笠原諸嶋相依リテアリ。

我が國ノ周圍ハ皆海ナリ、東南ナル大海ヲ、太平洋タイハイヤクトイヒ、西北ナル大海ヲ、日本海トイヒ、琉球ノ西北ナル海ヲ、支那海シナカイトイヒ、千嶋ノ北ナル海ヲ、オコクク海トイフ。其ノ中、最廣キハ、太平洋ニシテ、アメリカトイヘル遠キ國マデモ連レリ。

文題一、養生。二、われものを居くる口上書。

第五課 大日本帝國

小學科書言ノ

因

都會賑當

大日本帝國ハ山河ノ位地ニ因リテ、畿内
八道ノ九ツニ分タレタリ。畿内ハ本土ノ
中央ヨリ少シ西ニ當ル地ナリ。此ノ中
ニハ京都オホサカ大阪オホサカナドイヘル賑ヤカナル都會
アリ。

八道ハ畿内ノ外ノ方ニアル土地ニ
シテ、東海東山北陸ホク北海山陰山陽南海
西海道ノハツナリ。

狹幅

坪

八道ノ中ニハ東京センダイ仙臺センダイ名古屋ナゴヤ金澤カナザハ
廣嶋ヒロシマ熊本等ノ人口多キ處アリ、又安藝ノ
嚴嶋イツクシマ丹後タンゴノ天橋立アマノハシダテ陸前リクゼンノ松嶋ノ如キ
景色ヨキ處モアリ。

全國ノ長サハ凡千里ニ近ク、幅ハ狹キ
處ニテ三十里、廣キ處ニテ六十里程
アリ。一里四方ヲ一坪トシテ計フル時ハ、
二萬四千七百万方里ニコエ、人口ハ、四千萬ノ

日本ノ人口

上ニ出ヅ。

北海道ハ氣候最寒ク、琉球ハ氣候最暑シ。サレド、其ノ他ハ暑カラズ寒カラズシテ、程ノヨキ處多シ。

亦 夥

土地ハ、イツコモヨロシクシテ、農業盛シニ行ハレ、米麥ヲ産スルコト夥シク、茶生絲ヲ出スコト亦少カラズ。

山ニハ、貴キ材木ヲ生ジ、海ニハ、善キ

備

魚貝ヲ産シ、地中ヨリハ、多クノ金銀銅鐵ヲ出ス。

工業商業何レモ盛シニ行ハレ、人生ニ必要ナルモノハ、一ツトシテ備ラザルコトナシ。

文題 一、地圖。 二、わすれものを届けられたる返事。

第六課 神武天皇

日本ハ、遠き昔より天皇の知ー召ーたま

無

樂民治

奉賢武臣

へる國ふりて、其の御血をぢハ、初めより
今ふ至るまで代らせたまふことなく、いよ
いよ榮にて、長く國を保ち、民を治めたまふ
ことなり。

汝等のまてふ知れるが如く、今上天皇は
御先祖ハ神武天皇と申し奉り、御性賢武ふ
して、臣民を恵みたまふこと、甚深なりき。
天皇、初め九州の内なる日向宮にまゝく

て、其の國を治めたまひけるが、其の頃、
東方諸國にては、力あるもの處々に立て
こもり、互ふ物をかきめ、人をあつゝけれ
ば、世の中、甚、さわがかりき。

天皇之を聞し召し、民の苦ををさくせん

舟師

舟

とて、舟師をひきゐて、日向の宮を立ち
出でたまひ、道すがら命に従ふもの
を打ち平げ、遂に大和の國ふ入りて、長髓彦

亡を亡し、宮を橿原カシハラふきつきて、天皇の位に
即きたまへり。

おれより世の中、づゝに治り、次第ふ
開け行きて、遂に今日此すがこふ至り
たるあり。

されば、神武天皇即位の日を以て、大日本
帝國の立ちたる始とし、此の年を日本
紀元第一年と定め、此の天皇を、日本天皇

第一代と計へ奉るあり。

今上天皇は、第百二十代の天皇ふして、今
明治二十七年ハ、紀元二千五百五十四年なり。

文題

一、日本國の物産。 二、日本地圖のかりいれをたのむ口上書。

第七課 日本武尊

第十二代景行天皇の御代、東方に住める
蝦夷といふ土人、起り立ちて、物をかきめ、
民をなやましたり。天皇御心、此中に、皇子



日本武い、さきにはるぐ
西國に下りて、熊襲の
せいむつふ力をつく
たり。されば、此のたびも、
他の者をつかはして、
蝦夷をせいむつせしめん
と思ひたまふ。然るに皇子
自、進みて、其の任ふ當

詔

らんことをこひたまひければ、天皇深く感
て、其のこひを以れ、蝦夷せいむつの詔を
下したまへり。

拜身守

寶劔

皇子勇みて都を立ち出で、道をのら伊勢
の神宮を拜したまひけるに、其の御を
ふる倭姫命、ヤマトヒメノミコト身は守にせよ、とて、叢雲と
いへる一ふりの寶劔をさづけたまへり。
斯くて駿河ふ至りたまひけるに、國人

いつたりて歸服しれふをすゝめて野中
中ふいざあひ奉り、風上より火ををなち
て焼きあろさんとあたり。此の時皇子寶劍
をぬきてあろりの草をなぎたふし、火難を
火難
彼等
稱
のづれて遂に彼等を打ち平げたまへり。
されより此の寶劍を稱して草薙の劍と
いふ。

それより進みて相摸サガミに入り、船にて上總カヅサ

にゐらんとたまひけるに、海上大風起り
て船くつがへらんとせり。其の御きこさ
弟橘姫オトタチヒメ是れ海神のたより奉るならんとて、
皇子ふ代りて千ひろの水底ふあづきたまふ。
程なく風止きて、船上總につきければ、
皇子陸に上り、これより遠く進みて、北の
方ふ向ひたまふ。蝦夷其の勢におそれ、悉く
悉
降参してければ、諸國をめぐりて、都に

炊

諸稅免

乏

タマフニ、民家ノカマドヨリケブリ立ち昇ラザリケレバ、「アハレ、吾ガ民ハ、炊グベキ穀物モナクテ、木ノ實ヲ食ヒ、草ノ根ヲカムニヤアラシ。」トテ、三年ノ間諸稅ヲ免シタマヒキ。
斯クテ朝廷ニハ、御物モオヒく乏シクナリテ、屋根ハモリ、御衣ハヤブル、程ナリシカド、少シモ御心ニ掛ケサセタマハザリキ。

朕喜

納

其ノ後又、高殿ニ上リテ、見ワタシタマフニ、コタビハ、カマドノケブリ雲ノ如ク立ち昇リケレバ、「朕ハ富メリ。」ト喜バセタマフ。御ソバノ人々アヤシミテ、「御所ハクヅレ、御衣ハヤブレタルニ、富メリトノタマフコトノイブカシサヨ。」ト申シケレバ、「民ノ富メルハ、朕ノ富メルナリ。」ト仰セラレキ。
斯クテ人民ヨリ諸稅ヲ納メ、皇居ヲ

營マント願ヒシカドモ許サレズ、再三ニ
及ビテ、始メテ許シタマヒケレバ、人々我モ
我モト馳セ參リ、或ハ物ヲ奉リ、或ハ人夫
トナリ、日ナラズシテ皇居ヲ造リ上ゲタリ。
天皇カクノ如ク心ヲ用ヒテ民ヲアハレミ
タマヒシカバ、後ノ人其ノ大御心ヲハカリ
奉リテ、

高き屋敷登りて見れむ、

けぶりまづ民ののまごハ賑ひにけり。

トヨミタリ。

世々ノ天皇ノ民ヲアハレミメグミ
タマフコト、一々ハ聞エザレド、太テイ此
ノ如シ。當時ノ臣民ノ子孫タル我等ハ、
一日モ其ノ御恵ヲ忘ルベカラズ。

文題

一、草薙ノ劔。二、神社の祭り、人をまね、口上書。

稷粟豆

晚

相應植

糯粳

餅酢

穀物ニハ種々アレドモ、其ノ用ノ大イナルハ、米麥豆粟稷ノ五ツナリ、之ヲ五穀トイフ。

五穀ノ中、最、必要ナルモノハ米ナリ。

米ハ、稻ノ實ニテ、秋成熟ス。其ノ熟スルニ早キアリ、晚キアリ、其ノ早キモノヲ早稻トイヒ、其ノ次ギノモノヲ中稻トイヒ、其ノ晚キモノヲ晚稻トイフ。

稻ハ、大方水田ニ植ウルモノナレドモ、畑ニ植ウルモ、猶、相應ノ取り入レアリ、之ヲ陸稻トイフ。

米ニハ、粳糯ノ二種アリ、粳ハ人ノ常食トシテ、カクベカラザルノミナラズ、又之ヲ以テ、酒ヲ造リ、酢ヲ造ルナドサマぐノ用アリ。糯ハ、多ク餅ニツキ、菓子ヲ製スル等ニ用フ。

米ニ次ギテ、必要ナルハ麥ナリ、麥ハ冬畑ニ植エテ、夏成熟スルモノナリ。麥ニハ大麥小麥等ノ品アリ、大麥ハ農家ノ常食トシ、又、ミソシヤウイウ等ヲ造ルニ用フ。小麥ハ大方粉ニヒキテ、パン菓子ナドヲ作り、又ウドンサウメン等ヲ製スルニ用フ。

米麥ニ次ギテ、必要ナルハ豆ナリ、豆ノ中ニテ、其ノ用最、廣キハ大豆ナリ。人ハ大豆ナケレバ、ミソシヤウイウトウフ等ヲ造リガタシ。

粟稷ハ畑ニ作ルモノニテ、山國ノ人ハ之ヲ常食トス、其ノ子バリ氣アルモノハ餅ニツキテ食ス、之ヲ粟餅、稷餅トイフ。

文題一、仁德天皇。ニ、ちそりになりたる後、れいをいふ口上書。

第十課 愚ある僧

小乗經卷之三 雜品第三 佛說阿含經

山寺 僧 仙人 傳

昔或る山寺に一人の僧あり。五穀に代へて、松の葉を食へば、仙人ふあると云ふことを傳へ聞き、其れ後、米麥の食を止め、ひたすら松の葉をねり食ひ居たり。

經 輕 覺 呼

斯くて二三年も經る程に身の輕くあるやうに覺えければ、たや仙人ふありたりと思ひて、己が朋友又ハ弟子僧を呼び、「我

ハ、是にて仙人ふなりぬ。明日此の山より天上すべし」と云ふ。人々ハあやしく思ひ、いかども如何なる事を爲すにやとて、皆うちつれて見ふ來れり。

彼の僧も、岩の上ふ居り、人が來るを見て、「これより直に天上へさるべきおれども、さありてハ、おもゝろとなり、まづ此の岩ある松枝ふのりて見そべし」。

佛經新釋卷之三 雜品第三 佛說阿含經 十九

忽

とて、やがて岩の上より松の枝へ飛び
うつらんと一けるもの、もとより其の間遠く
つたさうければ、忽、飛び損ドて、谷におちり、
足こゝをさんぐにひきめて起き上るおと
も得ざりき。

脊扶

醫師

見物の人々驚きて、やうやく扶け上げ、脊
におひて寺に歸り、醫師にかけてれり。ち
せーが、今までの如く松の葉など食ひ居

藥

ては、からぶを養ひてきざをひやすおと
のふべからずとて、米のかゆを煮て食せ
けるに、彼も今も、仙人おあるおとを
思ひ止めけん、かゆを食ひ藥を服しければ、
程なくきざひひえたり。されども、折れ
たる足ひ、遂におほらず、一生不具の人と
なり。

鳥はつむぎあればこそ空中をもかける

なれ、つばさなき人、肉身のまゝ、ふて、如何知識ふ
空中を飛びあぐることはあるべきや。古
より仙人の雲ふのるといひ來れるは、皆
跡方をなき空言あり。然れども、今ハ、學問
も進み、人の知識も開けたれば、けいさきり
といふもれを造りて、容易く空中知識ふ行く
ことを得。あれも、水そがそといへる輕き
氣を袋につめたるふより、自、空中に昇る

ふて、猶木の葉に水ふりかぶると同知識
わけなり。

文題 一、五穀の効用。 二、米一石の徳を問ひ合はする口上書。

第十一課 香の物

蘿蔔ダイコンハ、根の大きなるにより大根とも
かく。

大根にハ、さまぐあれども、最、旨くして用
多きハ、冬大根あり。冬大根ハ、七月頃に種を

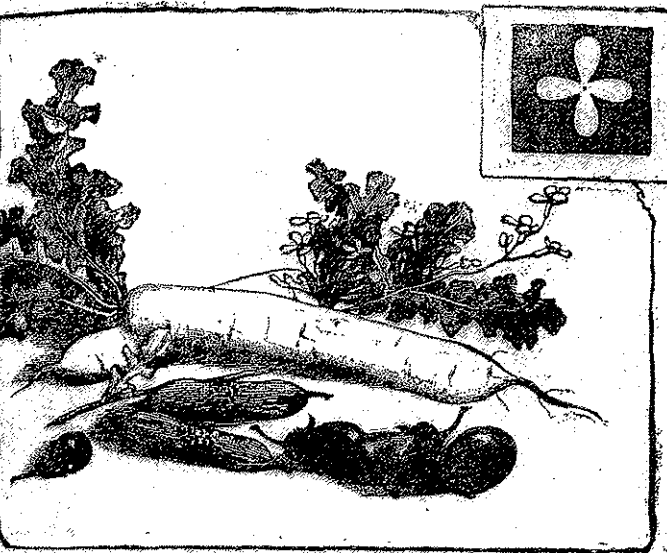
旨 蒔

置

莖

漬

時けば、其の年北十一月頃に至りて成熟す。
成熟したる大根を、其のまゝ、畑に置く



ときは、翌年の春長き
莖出でて、小さある白き
花咲く、花びらハ、四枚あり
て十文字ハ形を成せり。
大根を煮ても食ひ、又
ハ漬けて、香の物と

ても食ふ。

鹽

澤庵

香の物を作るに種々の法あり。干したる大根を、鹽と米ぬおとにて、漬けたるを澤庵漬といふ。これは昔澤庵といへる僧は、初めて造り出し、りとして、かく名づきといふ。

麴

淺漬

生干の大根に、鹽ぬお及び麴を交へて、漬けたるを淺漬の澤庵といふ。おれも、

貯 變 堪

澤庵漬にあらひて造りたるものにて、香味共ふよ。されど、久く貯へ置けば、味ひ變りて食ふに堪へず、故に何れの家も、之を造るは、澤庵漬の如くに多からず。いりぬのと鹽水とを以て、みその如きものを造り、其の中に大根きりりあはれ類を漬けたるを、ぬのそ漬といふ。澤庵漬とぬのみそ漬といふ、人の家ふかくべから

ざるものあれば、廣く世間に行はる。

文題 一、とらふ。

ニ、金二圓ふつき一斗の泉 三斗をちりもんする 口上書。

第十二課 醬油 味噌

料理 鉄 醬油

凡、食物ヲ料理スルニ缺クベカラザル品多キガ中ニ、其ノ用最、廣キハ醬油ナリ。肉類ヲ煮ルニモ、野菜ヲ煮ルニモ、之ヲ用ヒザルコトナシ。

醬油ヲ造ルニハ、マヅ煮タル小麥ト蒸シ

暫

桶

覆

汲

搾

タル豆トヲ交ヘテ、暫ク風ノ通サヌ處ニ
置キ、綿ノ如キカビヲ生シタル頃、取り出
シテ、桶ノ中ニ入レ、鹽水ヲ交ヘテ、フタヲ
覆ヒ置クベシ。
程經レバ、桶ノ中ノ汁、熟シテ醬油ノ
味ヒヲ生ズ、其ノ時之ヲ汲ミ出シテ、カス
ヲ搾り取り、釜ニテ煮レバ、即、醬油トナル
ナリ。

味噌

臼

樽

醬油ニ次ギテ必要ナルハ味噌ナリ。
味噌ハ、煮タル豆ニ鹽ト麴トヲ交ヘテ、臼
ニテツキ、之ヲ樽ニツメオキテ製スル
ナリ。味噌ハ、汁トシテモ用ヒ、又、物ヲ
煮ルニモ用フ。

豆ト麥トハ、モトヨリ人ノカラダヲ
養フモノナルガ、鹽モ亦人ノカラダニ
缺キガタキモノナリ。昔ヨリ是等ノ品ヲ

以テ、醬油ヲ造リ味噌ヲ製シテ、煮物ノ用ニ供ヘタルハ、自、養生ノ理ニカナヒタルコトナリ。

文題一、漬物。二、白米五斗の代金五圓の受取書。

第十三課 文字

汝等ハスデニ數多ノ文字ヲ學ビタレバ、今、其ノ文字ニツキテ、心得トナルベキコトヲ語ルベシ。

假字

漢字

楷書

略

省

今日廣ク用フル文字ハ本字ト假字ナリ。本字ハ昔支那ヨリ傳リタルモノニテ、之ヲ漢字トイフ。

漢字ノ書キ方ニハ、サマヅノ書キ方アレド、廣ク行ハルハ、楷書行書草書ノ三種ナリ。楷書ハ文字ノ形、最、正シク、行書ハ、楷書ヨリモ略シ、草書ハ、行書ヨリモ省キタルモノニテ、正シキ書キ物ニハ重ニ

楷書ヲ用ヒ、手紙ニハ重ニ行草ヲ用フ。
 假字ニハ、二種アリ、一ヲ平假名トイヒ、
 一ヲ片假名トイフ。平假名ハ、草書ヲ書キ
 改メテ作り、片假名ハ、楷書ノ扁又ハ旁冠
 ヲ取りテ作りタルモノナリ。平假名ハ、
 僧空海ノ工夫、片假名ハ、吉備^{キビノマキビ}眞備ノ發明ト
 言ヒ傳フ。

眞備ハ千百年前支那ニ渡リテ、漢學ヲ

修メ、技藝ヲ習ヒテ、之ヲ我が國ニ傳ヘ
 タル名高キ人ナリ。空海ハソレヨリ數十年
 後、支那ニ渡リテ、佛教ヲ究メ、歸朝ノ後之
 ヲ世ニ弘メタル名僧ニテ、即、弘法大師ノ
 コトナリ。

文題 一、味噌。 二、味噌の造り方を問ひ合はする口書。

第十四課 菅原道真

眞備、空海の後ふ出でて、學問道德共ふ

高かりーハ、スガハラノミチザ子菅原道真なり。道真幼より學を勤めて行ひ正ーかりーかバ、其の名早くより世にあらされり。其の朋友道真は賢名あるをねたみ、之をむづろめんとて、あひて弓を以せーめけるに、道真以つた間に習ひけん、弓矢の業をも善くーてければ、人々皆驚きてあらそふことを止めたり。

弓矢

卒業

愈

政

後大學を卒業ーて文章博士モンジロウシとあり、又讃岐守サマギノカミに任ぜられて、善く國を治めければ、其の名愈あらされたり。

後宇多天皇ウツタにつかへてふかく信任せられ、が其の御子醍醐天皇タイゴの御代に至りて、ついに右大臣とありたり。

道真恩に感ず、心をつくりて、天下の政ををさめけるほどに、天皇ハますます頼もー

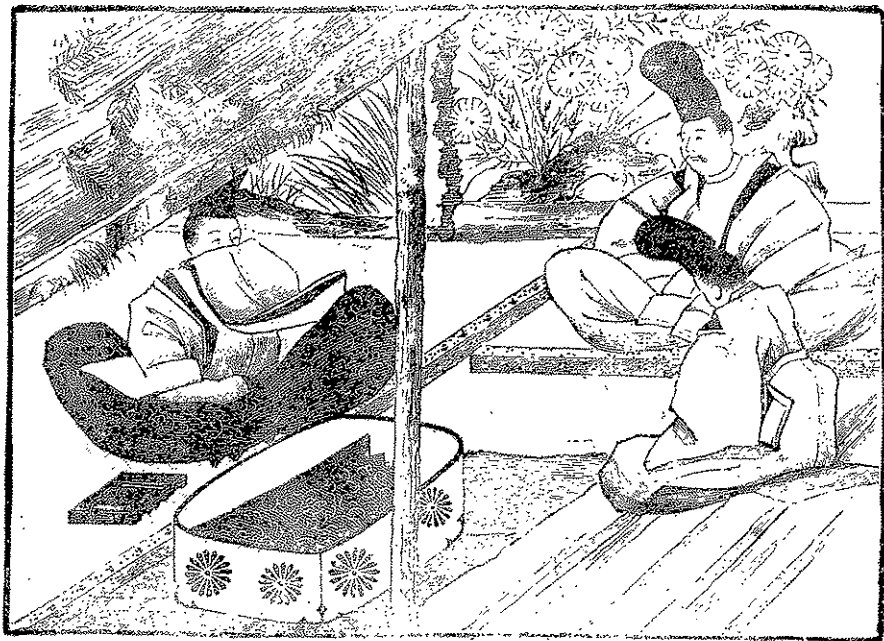
く思ひ召し、世の人はいよく貴ひたり。

此のころ藤原時平フヂハラトキヘといふものありけり。

其の家代々百官の上に在りて、天下の政をつかさどり、かば、道真の勢やうやく盛んみゝて、己れの上に出づるをねごと、ひそかに其の同類と共に道真の勢をくどかんことをはかり、つひに事をかまへて道真悪事

退 怨

奏 企



を企つるよりを奏上
したり。天皇、時平等
の言を信じ、道真の
右大臣を免れて、遠く
九州ある筑前チクゼンの太宰ダイザイ
府に退けたまふ。然れ
ども、道真君を怨む
奉る心つゆほども

慕

なく、たゞ日夜慕ひ奉るの外、他事ありき。
道真遂に太宰府にてみまのられたり。
後に至り、京都の人々社を北野に建て、其
の靈を祭り、が遂に朝廷にて祭らせたまふ
ことありぬ。諸國ふ多くある天神の社も、
皆道真を祭れるものなり。

文題

一、吉備前守と弘法大師。

二、味噌の送り方を問われ
たるふ答ふる口上書。

第十五課

空氣

鼻臭

秋ノ風ハ涼シク、冬ノ風ハ寒シ。風ハ
色モナク臭モナキ故ニ、目ニ見鼻ニ
カグコト能ハズ、サレド、スナヲ飛バシ、木
ヲ折ル等ノハタラキアルコトハ明カナリ。
風ハ形ナキ故ニ之ヲトラフルコト能ハ
ズ、サレド、袋ノ中ニミチビケバ、其ノ袋
フクラムユエニ明カニ物ノ入リタルヲ
知ル、風ハ實ニ奇妙ナルモノナリ。

奇妙

呼吸

汝等風ハ如何ナルモノト思フカ。
風ハ空氣トテ、蒸氣ニ似タルモノ、
動ケルナリ。空氣ハ我等ヲ取り卷ク所ノ、
無味無色無臭ノモノニシテ、處トシテ
アラザルナシ。其ノ効用サマダアルガ
中ニ第一我等ヲ始メトシテ、アラユル生物
ハ皆之ヲ吸ヒテ命ヲ保ツナリ。モシ其
ノ通路ヲタテバ、人畜ハ息絶エテ命ヲ

試

失ヒ、草木ハ、枝葉オドロヘテ枯レシボム
ベシ。汝等試ミニ暫シ鼻ヲオサヘ口ヲ
トヂテ、空氣ノ通路ヲ止メテ見ヨ、忽息
ノ絶エントスルヲ覺ユベシ。

燃

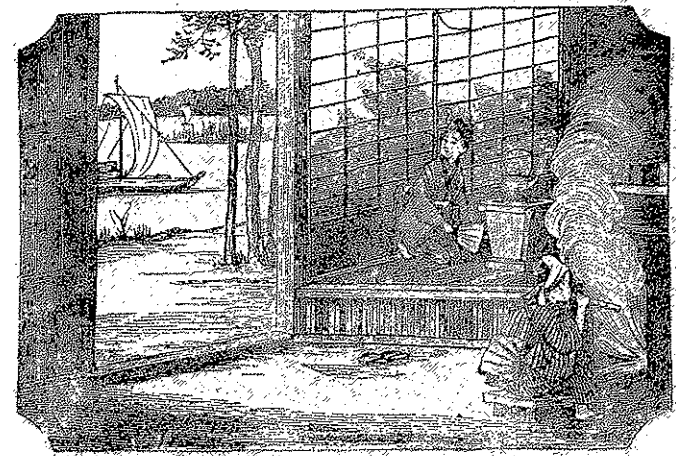
吹送

火ノ燃ユルハ、空氣アルガ故ナリ。汝等
食物ヲ煮燒キスル人ノ、火ヲ起サントテ、
ウチハニテ風ヲ生ジ、吹キ竹ニテ息ヲ送ル
ヲ見シコトアラン。又、炭ノ火ヲ消サント

壺

テ、火消壺ノ中ニ入レテ、
空氣ノ通路ヲ絶テルヲ見シ
コトアラン。之ヲ見バ、火ノ
燃ユルハ、空氣アルニヨルコト
ヲ知ルニ足ラン。

空氣ハ、又、物ヲオスカアル
コト、蒸氣ニ似タリ、汝等風ノ船ヲ行リ、木
ヲ動カスヲ見シコトアラン、風ハ、即、空氣



ナレバ、空氣ニ物ヲオスカアルコト明カ
ナリ。サレバ、智アル人、ポンプヲ造リ、空氣
ノ力ニヨリテ容易ク水ヲ汲ミ上グルコト
ヲ發明セリ。

文題 一、發原道真。 二、弘法大師の書畫をみせんとて
友をもちをまねく口上書。

第十六課 焚物

食物ノ煮焼キニ用フル焚物ニハ、炭薪
石炭ノ類アリ。

薪 焚物

炭ハ、樫、極樫、樺ナドヲ短ク伐リ、カマドニ入レテ火ヲカケ、其ノ能クモエツキタル頃ヲ見計ラヒ、空氣ノ通路ヲフサギテ造ルナリ。

薪ハ、山林ノ木ヲ程ヨク伐リテ、水氣ヲ去リタルモノナリ。樫、樺ナドノ堅キ木ヲ上トシ、松、柳ナドノ雜木ヲ下トス。

炭薪トスベキ樹木ハ、秋ノ末ニ伐リ

取ルヲヨシトス。此ノ頃ハ、樹木ノ水分少クナリテ、幹ノシマリヨクナレバナリ。石炭ハ、石ニ似タルモノニテ、色黒キコトウルシノ如シ。此ノ物ハ、火ノ力最強キニヨリ、汽車、汽船又ハ製造所ニテ、蒸氣ヲ起ス等ニハ之ヲ用ヒザルトコロナシ。

石炭モ、遠キ昔ハ地上ニ茂レル草木ナリシガ、地面ニ變化ヲ起シ、谷ハ上リテ山ト

埋

存

ナリ山ハオチイリテ谷トナルニ從ヒ、イツ
カ地ノ中ニ埋モレテ幾千年ヲ經ル程ニ、
遂ニ石ノ如キモノニナリタルナリ。サレ
バ石炭ノ面ニハ木理ヲ存スト物シリハ
イヘリ。

文題 一、風ノ傳キ。

二、明日午前十時ハ友をなづねんとて、
まつゝ其のおむきを申し入るゝ口上書。

第十七課

平重盛の忠孝

後白河天皇ゴシラカハの保元元年スストン崇徳上皇スストン天皇と

御仲
武士

御仲むつまじからず、兩皇各武士を召いて、
御位をあらそひたまふ。タマフノキヨモリ平清盛ヘイキヨモリと源義朝ゲンギチモと
共に天皇の御味方タメカタに参り、義朝の父タメカタ爲義
は其の子爲朝等タメトモと共に上皇タメカタに御味方
に参りたり。

合戦

斯くて、其の夜合戦ありけるに上皇ハ、
軍やぶれて終ふ讃岐に移されたまへり。
後三年を経て、義朝と清盛と仲悪くなり

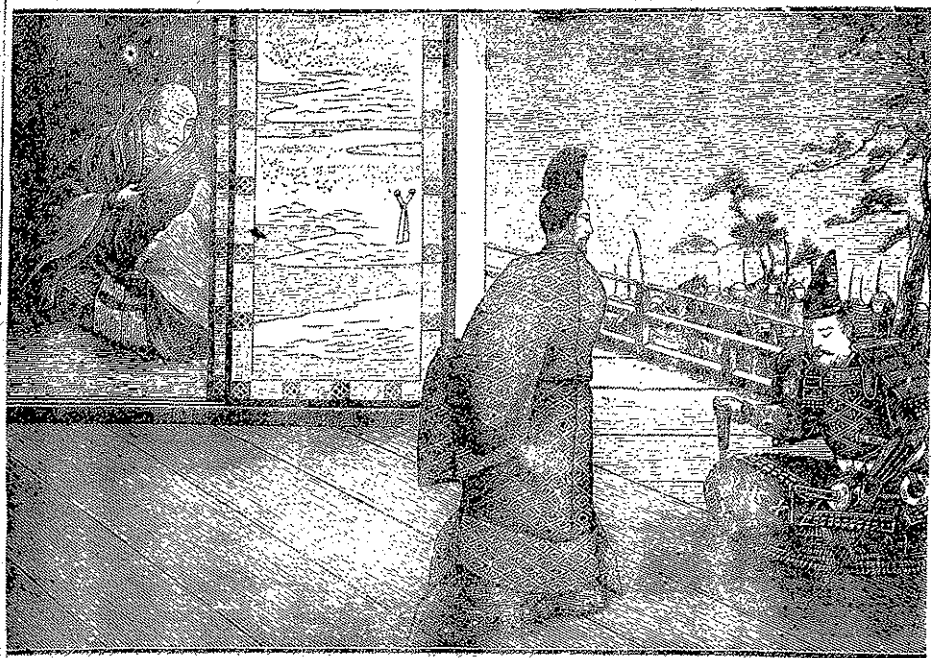
密

威 奢

て戦を始めけるに、義朝、清盛のために
打ちやぶられて、遂にころされり。

これより後は、清盛、ひとり勢を得て、奢
をきえめ、威をふるひければ、之をねとみ
にくむものやうやく多くおれり。其は
後高倉天皇の御代ふ至り、藤原成親ナリチカといふ
人、清盛を怨めることありて、兵を起さん
とけるが、後白河法皇も亦密におれと

押



心を合はせたまへり。

清盛聞きて大いお
怒り、速に成親を捕へ、
且、法皇を押しおめ
奉らんとて、親族家來
を集め、將に館を立
ち出でんとしたり。

清盛の長子シゲモリふ重盛

急

腹巻

謀叛

といふ人ありて、別の館に居るが、之を聞きて大いにお驚き、急ぎ父を以てめんとて、馳せ行きたり。清盛は、重盛の来るを見て、何となく腹巻の上にお法衣を覆ひ、出でて重盛にお向ひ、「成親は謀叛は、事の數ふを知らず、本は、法皇の御心より出でたるあり、故に世のあづまるまでハ暫く外に移し参らせんと思ふなり。」といふ。

愚

悲致院

重盛聞きもあへず涙を流し、「世にお皇室の御恩程重きはなり、然るを今其の大恩を忘れて、法皇を苦め奉らんとし給ふは如何ふ。重盛愚ありといつども、いかで父上のかゝる御企にお與みし申すべき、速に院にお馳せ参りて御守り致すべし。悲しきかゝ忠を致さんとすれば、不孝の子となり、孝を行ふんとすれば、不忠は臣とある、進退

是れきこまれり。斯かる世にいつまで生きて何かせん願はくハ、まづ重盛の首をきりて後、ともかくをせらるべし。と、直衣のそでをきりつゝ、いさめたり。

清盛もやゝさとりて、「いやゝそれまで仕事ハ思ひもよらず」とて、遂に思ひ止りぬ。

重盛の如きハ、親に孝を盡くし、君に忠を盡くし、いそゆる忠孝兩全の人なれば、

盡

芳

幾百年の後までも、其の芳き名を絶えざるなり。

文題 一、石炭。

二、左の手紙の返事を書け。

どううだん 致度事あれあり 明日 午前 十時 参上 致度 候 御つかふ 如何 候 御つかひ 申上 候。

第十八課 兵役

或ル村ニ、義三郎愛之助トイヘル二人ノ少年アリシガ、生マレ年モ同ジク、仲モ甚ムツマシカリキ。

二人トモ、晝ハソレド、田畑ニ出デテ、

農業ヲ勤メ、夜ハ一ツ處ニ會シテ、學問
ヲ修メケルガ、イツシカ月日過ギ行キテハヤ
二十一歳ニナリヌ。

待

兩人ハ、カ子テヨリ男ハ年二十一歳ニ
至レバ、皆兵卒トナリテ、三年ノ間、國ヲ
マモラ子バナラヌモノト心得居ケレバ、
早ク其ノ日ノ來レカシト心ノ中ニ
待チ居タリ。

體格
檢査
部

嘆

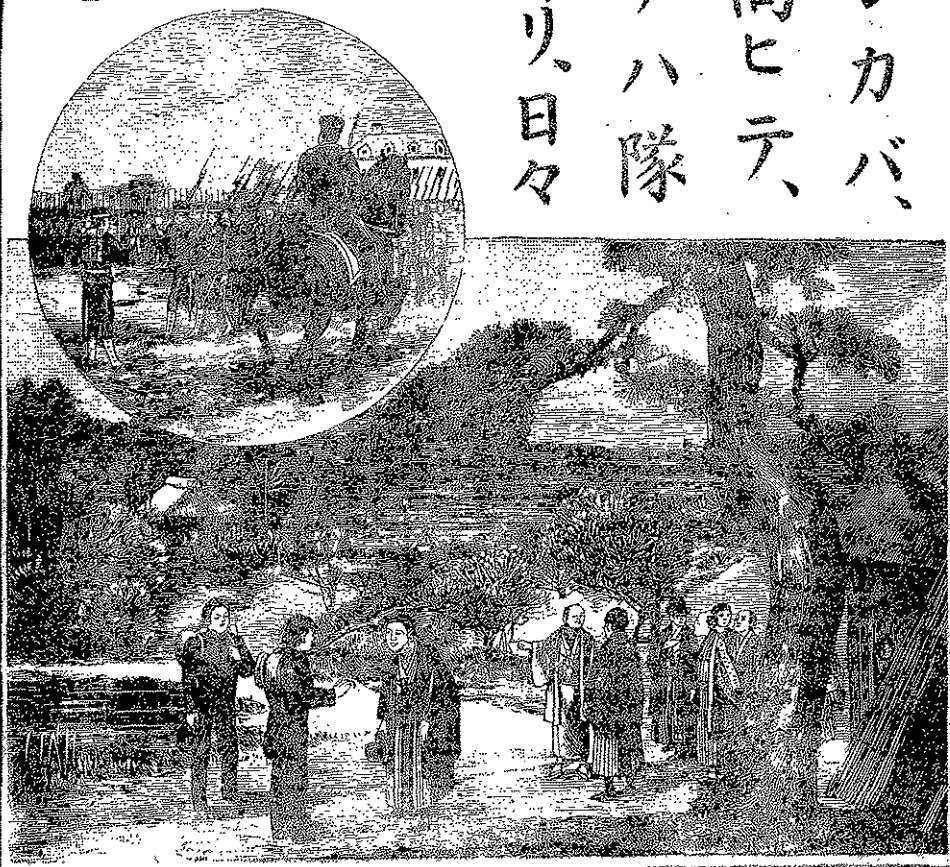
程經テ體格ノ檢査ヲ受ケケルニ、何レ
モ長ケアリテ健ナリシカバ、甲ノ部ニ
入レラレタリ。ソレヨリクジヲ引キケルニ、
兩人トモ、皆引キ當テケレバ、ヤガテ兵營
ニ入ルコトトナリヌ。

愚ナル人々ハ、其ノ子ノ兵卒トナルヲ
嘆キテ、ヨカラヌ企ヲナスモノモアレド、
此ノ二人ノ親タチハ、ヨク道理ヲワキマヘ

隊

勵

タル人々ナリシカバ、
各其ノ子ニ向ヒテ、
兵卒トナリテハ隊
ノオキテヲ守リ、日々
ノテウレンヲ
勵ミ、又、君ノ
タメ國ノタメ
ニハ一命ヲモ



惜

惜シムナカレ。
ト勵マシタリ。

兩人ハ皆勇ミテ兵營ニ入り、歩兵ノ
二等卒トナリ、親ノイヒツケヲ守リ、士官ノ
サシヅニ從ヒテ、怠リナクテウレンヲ勵ミ、
其ノ職ヲ勤メケレバ、遂ニ上等兵ニマデ
上レリ。

恙

ヤガテ定メノ月日モ過ギ去リ、恙ナク

兵役 故郷 迎 招待 厚

兵役ヲ卒ヘテ、故郷ニ歸リ來リシカバ、其ノ
村ノ志アル人々ハ、道ニ出テ迎ヘテ廣キ
寺院ニ招待シ、厚クモテナシテ、三年ノ間國
ヲマモリタル骨折ヲ慰メタリ。
我が御國ノ人々ハイヅレモ、此ノ村人
ノ如ク兵役ノ大切ナルコトヲ知リ、又
目出タク兵役ヲ卒ヘタルモノヲ慰ムル道
ヲ盡クシタキコトナリ。

是めら 御國 此 武士 は
以のゐるおとをか つとむ べき
たが 身おもてる 真心 を
君と 親とに 盡くす まで
文題一、平重盛。 ニ、友達のものとて、明日學校のかへりみちふ
立ちよられたりと申し入る、口上書。

第十九課 楠正成

今ヨリ五百年前、後醍醐^{ゴダイゴ}天皇ノ御代ニ、
足利尊氏^{アスカヒタカウヂ}トイフモノアリテ、天皇ニ叛キ

奉リシガ、ヤガテ九州ヨリ大軍ヲヒキ平テ
都ニセメノボルヨシ京都ニ聞エタリ。

雙

此ノ頃朝廷ニハ、楠正成クニキミサダシゲトテ智勇雙ビ

無キ大將アリシガ、之ヲ聞キテ、思ヘラク

マヅ敵ノ大軍ヲ都ノ内ニミチビキイレ、

兵糧

其ノ兵糧ヲ絶チ、饑エツカル、ヲ待チテ、

討チホロボスコソヨケレト、具ニ其ノ謀ヲ

謀

奏上シタリ。

然ルニ朝廷其ノ謀ヲ用ヒタマハズ、速
ニ攝津ニオモムキテ、尊氏ヲフセグベシト、
ノ詔降りケレバ、今ハ、

異議

異議ヲ申スベキニ

アラズトテ、兵庫ヲ

指

指シテゾ下リケル。

最期

正成ハ之ヲ最期ノ

合戦ト思ヒケレバ、櫻井



教訓

ノ宿ニ至リケル時、其ノ子正行マサツラヲ召シテ
教訓シケルヤウ、

獅子

獅子ハ子ヲ産ミテ三日ヲ經レバ、之ヲ
數千丈ノ谷底ニナゲウツ、其ノ子獅子ノ
氣アレバ、教ヘザルニハ子カヘリテ死セズ
トイヘリ。況、汝既ニ十歳ニアマリヌ
一言耳ニ留ラバ、我が教訓ニタガフコト
ナカレ。今度ノ合戰ハ、天下ノ分ケ目ト

留 既

思フ間、此ノ世ニテ汝ガカホヲ見シ
コト、今日ヲ限リト思フナリ。正成既ニ
討チ死ニスト聞キナバ、天下ハ必、尊氏ノ
物ニ成リヌト心得ベシ。然リトイヘドモ、
イツタンノ命ヲ助カランガタメニ敵ニ
降參シテ、父ガ多年ノ忠義ヲ汚スナヨ。
一門若黨ノ一人モ、生キノコリテアラン
程ハ、金剛山コンダシノ城ニ引キコモリ、時節ヲ

待チテ、忠義ノ旗ヲヒルガヘシ、再、君ノ
御世ト成シ奉レ、是レ汝ガ第一ノ孝行
ナリ。

ト、懇ニ申シフクメテ、故郷ニ歸シ、然シテ、
自身ハ進ミテ兵庫ニ至リ、賊ノ大軍ヲ
フセギテ、目ザマシク働キケルガ、從フ將士
多ク討タレテ、ワヅカニ七十二人トナリ、
其ノ身モ多クノ深手ヲカウブリケレバ、

今ハ、是レマデナリト、走りテ湊川ノ傍
ナル民家ニ入り、心靜ニ自害シテケリ。
足利氏ノ將士モ、サスガニ其ノ忠義ヲ感ジ
テ、皆、ナニダヲ流シ、尊氏モ其ノ首ヲツ、ミ
テ正行ノモトニ送リタリ。

天皇、正成ノ討チ死ニヲ聞シ召シ、大イニ
嘆キテ、位ヲノボセ官ヲオクリタマヘリ。
後、徳川光圀、正成ノタメニ、墓ヲ湊川ニ建

嗚呼

「嗚呼忠臣楠子之墓」ノ八字ヲシルシテ其

誠忠

ノ誠忠ヲアラハシタリ。

號

今上天皇ノ御代ニ至リ、其ノ傍ニ社ヲ
建テテ、湊川神社ノ號ヲタマヒ、歲時ニ物
ヲ供ヘテ、其ノ靈ヲ祭り給ヘリ。

文題一、

二、前課の逸事を書け。

科 会 社

明治廿七年八月十二日印
同 年八月十五日發
同 年九月廿五日訂正再版印刷
同 年九月廿八日發

印刷行

定價金九錢五厘

尋小讀本

金港堂書籍株式會社編輯所編輯

發行
印刷者

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社

代表者

右社長

原

亮

三

郎



賣捌所

官城縣仙臺市國分町五丁目

金

港

堂

大阪市東區南本町四丁目

金

港

堂

明治29
也 25
柳川島漆